平成 27 年度 第３回 石狩市社会教育委員の会議　議事録

日　時　平成 28 年２月 24 日（水）　午後２時～午後４時
会　場　石狩市公民館　第１研修室
出席者　委員長：木村 純　　副委員長：大橋 修作
委　員：相馬 保、安部 紀江、石井 量子、山田 治己、宮田あゆみ、片山あゆ美、
　　高橋 美恵子
事務局：生涯学習部次長　東 信也
　　社会教育課：主査 須藤 洋一、主事 本庄あゆみ
　　社会教育主事：斉藤 晶（兼社会教育課主査）、西山 隆之（兼社会教育課主任）
傍　聴　無し

会議内容
斉藤主査：みなさんこんにちは。本日はご多忙の中お集まりいただきありがとうございます。会議を始める前に、既にご承知かと思いますが、去る 11 月 26 日、石狩市社会教育委員でありました古村えり子委員がご逝去されました。ここに故人のご冥福をお祈りし、１分間の黙祷を捧げたいと思います。皆様のご起立をお願いいたします。
　ご着席ください。それではこれより平成 27 年度第３回石狩市社会教育委員の会議を始めます。はじめに石狩市教育委員会教育長　鎌田英暢よりご挨拶申し上げます。

鎌田教育長：みなさんこんにちは。本日の会議は本年度最後、そして本当に早いもので皆さんの２年間の任期最後の会議と聞いております。一言お礼も兼ねてご挨拶させていただきたいと思います。年度末を迎える時期であり、お忙しい中ご出席いただきまして、お礼申し上げたいと思います。只今、故古村えり子委員のご冥福を祈って黙祷を捧げましたが、その功績を振り返りますと、古村委員は平成 22 年から３期６年間にわたって社会教育委員を務めていただきました。在任中は、学識経験者として多くの知識によるご意見をいただくほか、特に子育て世代の課題や、更には女性の人権問題などについて積極的にお話を頂くなど、本市の社会教育行政の推進に一方ならぬご尽力を頂きました。あらためて心から感謝を申し上げると共に、故人の冥福を心からお祈りします。さて、委員の皆様におかれましては、２年間にわたり、社会教育の推進はもとより、本市のまちづくりなど、石狩市社会教育委員の会議の委員として真摯な、そして活発なご議論をいただき、貴重なご意見もたまわったところでございます。改めてこの場で感謝とお礼を申し上げたいと思います。変化の激しい現代社会におきまして、私達を取り巻く社会情勢は刻一刻と変化し、様々な課題に直面しているわけですが、このような多くの課題を抱える中で、石狩市がどのような活路を見出していくべきかということを思うと

き、自らの地域や文化についての理解を深めながら、地域の人々の繋がりを今一度見つめなおすことも大切でないかと考えているところでございます。この２年間の取組みを振り返りますと、平成 25 年度の社会教育委員と学ぶ市民講座で、学びを基本に、本市が抱える課題を焦点化するとともに、解決に向けた具体策もあわせてご議論いただき、その内容についても、この度の教育プラン後期基本計画に反映することが出来ました。また今年度におきましては、厚田の方々とともに地域の宝を共有するワークショップを開催し、地域が持つ人と人との力で諸課題に取り組んでいる厚田区について、委員自らの学びを深められてきました。このことは、まさに時代が求めている、行動する社会教育委員の実践そのものであると考えているところです。また第５期石狩市総合計画では、30 年後を見すえたまちづくりを進めるため、創造、絆、環境をキーワードとして、石狩市への誇りや愛着を更に深められるよう、石狩プライドの醸成を目指しているわけでありますが、この中でも歴史文化の交流や、人と人とが繋がる町が将来像として掲げられ、これからは生涯学習・社会教育の様々な取組みを更に推進していく必要があると認識しているところでございます。本日は、今年度最後の会議として、平成 27 年度事業の振り返り、次年度以降の方向性などについてご議論いただくことになっております。大所高所の視点から様々なご意見をいただければとお願いする次第であります。最後にあらためまして委員の皆様の 2 年間の活動に対して重ねてお礼を申し上げますとともに、今後の様々な場面での皆さんのご活躍をご祈念申し上げ、簡単ではありますが開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いします。２年間ありがとうございました。

斉藤主査：続きまして、木村委員長よりご挨拶を頂きたいと思います。よろしくお願いいたします。

木村委員長：みなさんこんにちは。今日は年度末を控え、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。古村委員についてですが、彼女は私のゼミの３年後輩で、色々なことがありましたので、少しお話したいと思います。彼女は最初、北大の農学部に入学したのですが、転部をして教育学部の社会教育ゼミナールにやってきました。私は二十歳過ぎの古村先生をよく知っているのですが、小樽の古村製麺という老舗の製麺会社のお嬢さんでした。庶民的な感じであまりお嬢様には見えなかったのですが、そういう経歴をお持ちでした。10 月の初めに倒れて、すぐ病院に運ばれたのですが、意識が戻らないまま、1 ヶ月位ののち、お亡くなりになられました。社会教育委員の方や石狩市民の方も何人か葬儀にいらっしゃっていただいて、感謝したいと思います。古村先生は北海道教育大学の社会教育主事講習の責任者をされており、去年までは 30 人ぐらいの受講生を恵庭市に連れて行って、恵庭市の社会教育を実地で勉強させておりましたが、彼女は石狩の色々な取組みを、できるだけ経験が無い人たちや、これから社会教育の現場で活躍する若い職員達に学んでもらいたいと、社会教育主事講習の実習生を石狩に連れてく

るのが念願だったのです。石狩は恵庭と違って、町の中に適当な宿泊施設が無く、なかなか実現しなかったのですが、今年度は念願がかない、石狩市で実習を開催し、皆さんにもご参加いただきました。息子さんが 3 人いらっしゃって、末の息子さんが今年 4 月に網走の東京農大に入学しました。ようやく一人暮らしになって、これから自由になるとのことで、一度だけ一緒にお酒を飲み交わしましたが、残念ながらその機会を最後に亡くなってしまいました。石狩の社会教育についてとても成果を上げてきたことを、できるだけ多くの人に知ってもらいたいということと、皆さんのおかげで彼女の念願がかなったことについて、感謝の気持ちをお知らせしたいと思います。

斉藤主査：教育長は次の公務のため、退席させていただきますのでご了承ください。

鎌田教育長：今後ともよろしくお願いします。失礼いたします。

斉藤主査：ではこれ以降の進行につきまして、委員長にお願いします。

木村委員長：最初の議題は報告事項ですが、今年度、皆さんにご協力いただき、色々な研修会に参加していただきました。最初に、平成 27 年度北海道社会教育研究大会が浦河町で開催されましたが、出席していただいた大橋副委員長からご報告をお願いします。

大橋副委員長：第 55 回北海道社会教育研究大会日高大会に、大黒委員と私と西山社会教育主事の３人で参加しました。６つの分科会の提言について、事前配布資料の中に記載されております。また、今日配布した資料の中に、各分科会のまとめの速報について掲載させていただきましたので、後でご覧ください。各分科会では全道からの報告がありましたが、私たち石狩市の社会教育委員の取組は、全道の中でも、十分発表に値するような取り組みであると感じました。本当にいい勉強させていただいたと思っております。この中でも、基調講演で、まちのたから総合アドバイザーの岸川先生のお話がありました。三重県での取り組みですが、この方がまちのたから総合特命監として、高校レストラン「まごの店」を地域おこしとして立ち上げられました。テレビでも取り上げられて話題になったのですが、これから社会を背負って立つ高校生、つまり、未来の大人たちのために、私達に何が出来るかというテーマで考えることは、とても大事なことだと感じました。私も学校関係に取り組んでいますが、特に少子化という問題を前に、子どもたち一人ひとりが、これからの社会を背負って立つ立派な大人に育っていけるような体制作りが、今後の大きな課題であると感じました。最後には、記念講演として日本女子ソフトボールの宇津木監督のお話を聞いてまいりました。大きく秀でたものを持って活躍された人の話には、感動する内容が多くありました。ありがとうございました。

木村委員長：次に、平成 27 年フォーラム石狩が千歳市で開かれましたけれども、これは

西山社会教育主事からご報告願います。

西山社会教育主事：平成 27 年度フォーラム石狩については、お手元に開催要項をお配りさせていただいております。当日のプログラムの内容は、事例報告とグループワークでした。フォーラム石狩は、石狩管内教育委員会協議会が主催している事業でございます。教育委員会協議会は、石狩管内の市町村教育委員会、管内ＰＴＡ連合会のほか、学校関係・社会教育関係団体などで構成されている組織でございます。フォーラム石狩については、毎年持ち回りで実施しておりますが、今年は千歳市で開催され、千歳市と恵庭市の事例発表がありました。一つは、ジュニア景観士講座、子どもまちなみ探検隊という取り組みについての発表でした。ＦＰスペース千歳というまちづくり団体が主催となり、小学校３年生から６年生までを対象として、千歳の市街地や千歳川といった町並みを子どもたちがカメラで撮影し、自分達の探検マップを作るという手法をとおして、将来のまちづくりの担い手になってほしいとのねらいで実施しているとのことです。更にはＯＢ・ＯＧも巻き込んで、活動の幅を広げて行く動きをしているとの事例でした。二つ目は、北海道文教大学のボランティア部の代表と副代表２名による発表でした。文教大学のボランティア部は、以前はサークルだったのですが、サークルのうちはどちらかというと色々なことに参加して手伝っているだけだったものが、次第に意識が変わってきて、ボランティア参加だけではなく、地域との結びつきを強く持とうと思ったとのことです。ボランティアに参加することで自分たちが成長することを目標に置いて、部への昇格を念頭において動いてきたそうです。その中では、行政などとの連携もあったそうですが、何よりも、ボランティアが自分の経験やレベルアップのほかに、地域の中で教え、教えられる場であるということを念頭においているという内容の発表でした。

木村委員長：どうもありがとうございました。二つの研修の内容について報告していただきましたが、皆さんから質問はございませんか。続いて、社会教育事業実施報告について事務局から報告してください。

斉藤主査：社会教育事業の実施報告の前に、本市の社会教育関係団体の表彰について報告させていただきます。既に新聞報道等でご覧になっている方がいらっしゃるかもしれませんが、去る２月 10 日、石狩市の社会教育関係団体である「伝承あそびボランティアおてだま」さんが、平成 27 年度石狩管内教育実践奨励表彰を受賞いたしました。ご覧の写真は授賞式の様子で、中央が代表の武川明子さんです。石狩管内教育実践奨励表彰というのは、管内の社会教育、学校教育の充実振興を目的として優れた実践活動を行っているものに対して授与するもので、昭和 49 年から行われております。今回は社会教育で１団体、学校教育で３校が受賞しております。本市では平成 19 年度に「石狩市生涯学習講座企画ボランティアの会」が受賞して以来、８年ぶりの受賞となります。「伝承あそびボランティアおてだま」は、平成７年に発足し、市内のイベント等で伝承あそびの普及

活動を行い、今年度で20周年を迎えました。その活動内容が深く評価され、今回の受賞に至っております。以上で社会教育関係団体の表彰についてご報告いたします。以上です。

西山社会教育主事：それでは引き続きまして報告案件、平成27年度の社会教育事業の実施報告について報告させていただきます。既にお手元の配布資料をもとに説明させていただきますが、資料だけではイメージが湧きませんので、画面に事業の写真を映しながら、主だったものをピックアップして説明したいと思います。

まずは、社会教育委員の会議関係についてです。先ほどの古村先生のお話にも触れますが、社会教育主事講習の実習として、８月４日に「パネルディスカッション　厚田区の地域づくりと社会教育の課題」が開催されました。当日の参加者は29名でしたが、うち石狩市の社会教育委員から10名のご参加がありました。パネラーとして、地域協議会の佐藤会長、厚田こだわり隊の河合さん、漁業の中井さん、地域おこし協力隊の小島さん、沼田さんにお話をうかがいました。続きまして８月28日に「石狩管内社会教育委員等研修会」がございました。本町の弁天会館を会場に、北海道教育大学釧路校の廣瀬教授をお招きして、「これからの社会教育」というテーマでご講演をいただきました。その他にも尚古社、弁天歴史公園、俳句ロード、砂丘の風資料館などを施設見学いたしまして、後半は「文化活動を活かしたまちづくり」というテーマで、石狩市文化協会　棚橋事務局長と、石狩市教育委員会文化財課の工藤課長からそれぞれお話をいただきました。夜は俳句を作り、金大亭で交流会を開催いたしました。

続きまして、社会教育委員と共に取り組むワークショップでございます。日程は11月20日、参加者は46名で、うち、９名の社会教育委員にご参加いただきました。ありがとうございました。「厚田を石狩の宝に～石狩市民が知っておきたい〇〇のこと」というテーマで開催しましたが、詳しい振りかえりについては、後ほど次第の中でお願いしたいと思います。

続きまして、学校支援地域本部事業、写真は花川北地区の様子です。ニュースで放送されましたので、ご覧になった方がいらっしゃるかもしれませんが、花川小学校の漢字検定の様子になります。右下は、花川中学校の花壇の整備の様子です。続きまして、花川南地区の学校支援地域本部事業の様子です。左上の写真は樽川中学校の「戦争体験を聞く」という事業で、渡辺みつさんにお話をいただきました。サポートいただいているのは高橋委員です。右下の写真は、スキー学習の授業補助の様子です。小さい子どもたちは自分でスキーを履くのに時間がかかりますので、地域の方々に補助をしていただくことで、円滑なスキー授業に繋がっているものと思います。続きましては、学校地域支援本部事業の「あい風寺子屋教室」花川南小学校での様子です。左の写真が漢字ドリルの採点の様子です。右下は囲碁・将棋を地域の皆様と一緒に教わっているところです。次は同じくあい風寺子屋教室で、今年度から始まりました紅南小学校の様子になります。紅南小学校は平成27年度からスタートしました。内容は、石狩翔陽高校科学部の生

徒さんと先生に来ていただき、実際に熱気球を作ってみようという取組みをしております。右下の写真は茶道です。作法やお茶をたてるという体験をしている様子です。続きましては、お越しいただいた方もいらっしゃると思いますが、市民文化祭の舞台会場です。日本舞踊や洋舞洋楽なども多く行われ、今年のテーマは「ひびき」、市民手づくりの文化祭といたしまして、10 月 17 日と 18 日に舞台部門が行われました。参加者は 28 団体 296 名、入場者数は 1,510 名でした。続いて文化祭展示会場です。右下の写真は木彫りの仏像で、メインブースに据えられておりました。こちらの会場は 10 月の 16、17、18 日の３日間開催され、参加者は 39 団体 114 名、入場者数は 2,297 名でした。

続きまして情操教育スタートプログラム「おしゃべランド」です。社会教育課が主催して情操教育の事業をいくつか行っておりますが、この事業は小学校１年生を対象に、プロのナレーターの方に出演いただいて音楽朗読劇を行っており、石狩ユネスコ協会の「くるりんぱ」も一緒に展開しております。次は情操教育のセカンドプログラム「Ｔｈｅ　Ｍｕｓｉｃ」です。中学校１年生を対象として、生のジャズの音楽を聴いてもらい、心を揺さぶる体験をしてもらいます。生徒たちが打楽器を持って、演奏者とセッションもしております。続いて「あい風コンサート」です。小規模校を対象とした、音楽芸術に触れる機会として実施しており、演奏者については学校に選んでもらい、希望の演奏・歌を聞いてもらっております。続きまして、情操教育プログラム「能楽教室」です。これは平成 26 年度から始めた事業ですが、柴田稔さんという能楽師の方をお招きしまして、基本中学１年生を対象に、中学校で能楽のいろはを学び、触れてもらうという事業です。写真で女性の装束をまとっているのは男子です。実際に装束を着てもらいまして、会場はなかなか湧きあがっていました。

次に、石狩は俳句のまちということで、俳句コンテストなどの事業を行っておりますが、コンテストの一般の部が 11 回目、そして子どもの部がちょうど 10 回目を迎えたことから、記念事業として子ども俳句教室、吟行・句会を開催しました。小中学生を対象に、俳句のいろはについての授業の後、実際に厚田公園に行って、自然や歴史などを題材に俳句を作ってもらおうという事業を実施しました。写真は、俳句コンテストの表彰式の様子です。昨年は花川北コミセンで行いましたが、今年度は南コミセンで、文化祭の会場にて表彰式を実施しております。

続きまして市民カレッジの講座を二つほどご紹介したいと思います。写真は、「北海道遺産を巡る旅」という講座です。北海道遺産にも色々あるのですが、北大をはじめとした札幌市内の北海道遺産のほか、三笠炭鉱、砂川の北海幹線用水路、そして写真では、皆さん滝川のジンギスカンを食べています。ジンギスカンは食文化として北海道遺産に認定されています。続きまして、主催講座の札幌アート散歩です。札幌芸術の森におきまして、野外彫刻館をボランティアガイドに案内していただいたほか、同時にＰＭＦのコンサートを一緒に鑑賞しました。

次に、シニアプラザはまなす学園を紹介します。こちらは年間を通して 60 歳以上の方の入学者を募り、色々な文化活動やサークル活動等を行うもので、写真は入学式とはま

なす学園文化祭の様子です。入学者は 83 名で、年間 17 回の事業を実施しています。

次からは文化財課等、他課の紹介になります。写真は、文化財課の事業で、勾玉作りとビーチコーマーズです。勾玉作りは、砂丘の風の会というボランティアの皆さんが毎年主催して実施しています。ビーチコーマーズは、石狩川の河口付近で漂着物を探そうという事業です。続きまして、ウミベオロジー石狩海辺学です。札幌の紀伊国屋書店のロビーで毎年実施しております。写真は、ブルーシートを広げて、実寸大の鯨の頭の骨をイメージしている場面です。もう一つ、石狩紅葉山 49 号遺跡からのメッセージという講座で、北海道大学の小杉教授にご講演をいただいております。

続いては厚田の文化祭です。昨年度まで厚田生涯学習フェスティバルという位置付けで実施しておりましたが、内容のリニューアルをはかり、今年度から厚田の文化祭という名称で実施しております。従来１日であった展示の日程を３日間にのばすなど、工夫を凝らし、活性化を図っているとのことです。写真は石狩南高校の吹奏楽部が来て、合同演奏しているところです。続きまして厚田区カローリング大会、厚田区ウィンターレクフェスタです。８月に実施した厚田のパネルディスカッションでも話がありましたが、厚田には７つの団体がございます。その内の１つ、厚田区コミュニティゆめクラブが中心となって毎年実施しております。

続きましては、浜益で実施している生きがいづくり学園の様子です。写真は卒園式と、卒園式のあとに実施されたドラムサークル講座の様子です。次は、浜益生涯学習課の放課後子ども教室の様子です。夏アイテムを作ろう！という内容で、オリジナルうちわを作っている様子と、リズム＆ダッシュ、体を動かして熱くなろうという事業の様子です。続いて、浜益文化祭です。市民文化祭の浜益会場として毎年実施しており、写真は、石狩地区から参加している詩吟の団体です。例年、数団体が参加し、交流しております。

続きまして、図書館になります。写真は恩納村での、石狩市民図書館と恩納村文化情報センターとの友好図書館承認式の様子です。もう１枚の写真は、市民図書館がこの度開館 15 周年を迎えましたので、利用者、ボランティアの皆さんを交えて図書館のおたんじょう会を実施した様子が写っております。次の写真は、石狩市手話フェスタでの市民図書館出張貸出ブースの様子と、図書館で活動している、布の絵本ボランティアにじというボランティア団体が、群馬県桐生市で開催された、第９回手作り絵本全国コンクールで、織物のまち大賞を受賞した様子が写っています。

続きまして子育て支援課です。地域プレーリーダー事業では児童館キャラバンを開催し、大人が地域のプレーリーダーになるための講座を実施しています。写真は子どもたちに遊びを教えている様子と、ダンボールでキャタピラ競争をしている様子です。次は子ども参加プロジェクト事業です。石狩の未来を考える子ども議会が開催され、田岡市長をはじめとした市職員も参加しております。ほかにも、図書館で中高生フェスティバルなども開催されています。次は、ジュニアリーダー養成講座です。市子連との共催で、実際に子ども会活動の内容や、リーダーの役割とはどのようなものかについて講義

したあと、２日目は、運動会をテーマにレクレーションを企画し、実践するという内容を実施しています。続いての写真は、ぴよぴよひろばと、ＮＰプログラムです。ぴよぴよひろばは、乳幼児を持つ親の子育て講座として実施しており、ＮＰプログラムは、「Nobody Perfect」、誰も完璧な親なんていないよ、という主旨で開催されております。この事業も乳幼児を持つ親を対象としておりますが、親同士の話し合いや交流を通して親自身が気づき、自立を促すという内容の事業です。

続きまして、スポーツ健康課の事業になります。写真はわんぱくスポーツスクール in 厚田、実際に厚田川で野外スポーツ体験として、子どもたちがゴムボートで川のぼりを体験します。最後は、子どもの体力向上事業です。この事業は多くの学校で実施しておりますが、写真は運動会目前ということで、浜益小学校での走り方の練習の様子です。以上で事業報告を終わります。

木村委員長：どうもありがとうございました。ただいまの報告に質問等ありますでしょうか。よろしいですか。それでは、報告事項が終わりましたので議事に入りたいと思います。平成 28 年度社会教育関係予算案と主要な施策の概要について事務局から報告をいただきます。

須藤主査：それでは、平成 28 年度の社会教育関係予算について、資料に基づいてご説明申し上げます。社会教育費では、社会教育総務費 57,229 千円、青少年教育費 780 千円、成人教育費 768 千円、文化振興費 5,363 千円、公民館費 9,489 千円、美登位創作の家管理費 2,085 千円、文化財保護費 2,975 千円、研修センター4,521 千円、図書館費 169,595 千円、資料館費 6,563 千円、社会教育費合計で 259,368 千円となっております。

保健体育費では、保健体育総務費 61,193 千円、体育施設費 92,533 千円、保健体育費合計では 153,726 千円となっております。

次に、平成 28 年度の主要な社会教育事業の概要について説明いたします。平成 28 年度の主要な社会教育事業を、教育プランの３つの柱ごとに分類をしたのが、資料にございます、平成 28 年度主要な社会教育事業の概要です。事業名と予算額についてご説明いたしますが、詳細につきましては資料でご確認ください。

教育プランの柱Ⅰに対応する社会教育事業としては、学校支援地域本部事業 1,474 千円、教育プランの柱Ⅱに対応する社会教育事業としては、情操教育プログラム 1,027 千円、学校図書館等充実事業 23,028 千円、スポーツ健康課の健康・体力づくり推進事業 902 千円、2020 年東京オリンピック・パラリンピック合宿誘致推進事業 700 千円、子育て支援課の放課後児童健全育成事業 117,853 千円、教育プランの柱Ⅲに対応する社会教育事業としては、生涯学習講座開催費 500 千円、学び交流センター改修事業 27,800 千円、社会教育関係団体運営補助金等 2,253 千円、図書館資料等購入事業 14,000 千円、図書館交流事業 325 千円、子どもの読書活動推進事業費 975 千円、図書館設備改修等事業 40,000 千円、芸術文化振興交付金等 2,352 千円、資料館管理運営事業 6,563 千円、鮭の博物誌刊行事業 1,173

千円、歴史文化財修復事業 1,406 千円となっております。以上で説明を終わります。

木村委員長：平成 28 年度の社会教育関係予算について説明いただきましたが、質問等はございませんでしょうか。図書館の改修はどの程度の規模なのでしょうか。

東次長：図書館設備改修等事業に 4,000 千円計上しております。昨年の施設の定期点検で、屋上の防水シートの一部が断裂しておりましたので、簡易修理で冬を過ごしたのですが、図書館は特殊な形状をしていて、棚田のように仕切られている部分があることから、全て防水してシートを被せ直すという工事が必要になりました。他の施設と異なり、資料が蔵書されている関係上、水が落ちてくると非常に大きな問題になってしまうこともあり、金額は非常に大きくなりますが、修繕させていただこうと考えております。

木村委員長：ありがとうございます。

山田委員：例えば厚田区コミュニティゆめクラブをはじめ、厚田区には７つの団体がありますが、その中ではスポーツ事業なども実施しています。ところが、市からの助成は無いと思うのです。一口千円というように、市民からお金を集めて、厚田の地域内でまかなっていますよね。先日も厚田公園でスキーの事業があったのですが、浜益でもこれから有り得るわけですが、そういった地域振興のための事業に対する補助は無いのでしょうか。市民カレッジは、補助金はもらっていないのですが、厚田などの地域でやっている事業に対する補助については、行政としてはどうなのでしょうか。

東次長：厚田浜益の具体的な予算については、手元に詳細な資料がないのですが、基本的にはそれぞれ所管ごとに分かれていて、例えばスポーツ関連費用であれば、スポーツ関係事業予算の中で、厚田浜益にかかる費用もそれぞれ予算計上されているはずです。全市の中でどういう取組みをしていて、それぞれどれだけの予算が使われているのかは、セクションごとに整理されていると思われます。ただし、地域協議会という形がありまして、そこで色々な地域独特の取り組みをしようという動きもあります。その動きについては、地域協議会の中で予算を含めた整理をしているので、大きな２つの流れがあるかと思われます。

山田委員：必要な予算は一部計上されているということなのですね。

東次長：必要に応じて、一部予算計上されているものもありますし、地域協議会の中で整理されているものもあります。中には、地域の自己負担で実施している事業もあるかもしれません。推測もありますので具体的な数値は申し上げられませんが。

木村委員長：他にいかがですか。厚田、浜益の社会教育の課題について考える上で、私たちも少し勉強しなければいけないと思いますが、一方で、自分達でお金を出し合って事業をすることについては、私は積極的な意味で捉えています。他にご意見はございませんか。

大橋副委員長：子育て支援課の放課後児童クラブについて、対象が６年生までになり、時間が６時半から７時までに延びています。そこを利用している子どもの親から聞いたのですが、低学年のうちはいいのですが、高学年になってくると色々なルールや決まりが守られていないという話を聞きました。そういったことの話し合いはどこでされるのか、と聞かれたことがあります。おそらく子育て支援課だと思うのですが。色々大変なのだと感じました。

東次長：基本的には、共働き家庭など、子どもを見る人がいない世帯を対象に、特に低学年、１年生から３年生までを対象にしていたものを、拡大したということだと思います。確かに今の経済状況で、共働き世帯が増えていますが、現実の問題として１年生と６年生では、体格もやることも違いますので、今まで無かった問題にどう対処していくかということは、所管としても課題を持っていると思います。

大橋副委員長：学校と連携して対応しなければならないことが色々と出てくるだろうと感じています。

東次長：まだ始まったばかりだと思いますので、少しずつ改善が考えられていくとは思います。

木村委員長：他にいかがでしょうか。生涯学習講座開催費として 50 万円とありますが、いしかり市民カレッジへの支出額は、カレッジ全体経費のうちのどれぐらいの割合を占めるのでしょうか。

山田委員：市からの支出は、補助金ではなく消耗品などの提供だと思います。実際には年間 18 講座開催しています。受講生から受講料を集めますので、年間予算は結構な額になります。

東次長：補足させていただければ、市民カレッジには、補助金などの形で現金は支出しておりません。予算としては、消耗品と印刷製本費合わせて 15 万円分を提供させていただいております。これらを除くとほとんど受講料と年会費でまかなっているという状況です。

木村委員長：ありがとうございました。他によろしいでしょうか。

相馬委員：スポーツ健康課の健康・体力づくり事業についてですが、浜益地区で言うとさらに予算が少ないということになりますね。私はラジオ体操に 20 年位関わってきているのですが、当初は予算もそれなりにあって、やりくりしてきました。しかし、今は予算が少なくなっていますし、行政の担当が保健福祉になっています。予算的にもスポンサーがいないと困るのですが、今では郵便局は昔に比べるとあまり協力できなくなっています。浜益地区には郵便局がありますから、局長さんに話をして、何とか参加賞の景品を出してもらっています。私たちも自費でメダルを用意していますが、子ども達の人数も少なくなっていますが、川下地区では、お父さんお母さん方の参加が多くなってきています。特にお母さんが多くなってきているのですが、朝６時半のラジオに合わせて参加者が年々増えてきています。できれば、浜益でも一人でも多く方に参加してもらって、健康づくりのために役立てばいいと私は個人的に思っていますが、狭い地区ですから、局長と話し合って、ラジオ体操が終わった後に参加賞を出すことで、また次の年も、お父さんお母さんにも声をかけて参加する人が増えてきていますので、多くなってきています。それは予算関係がどうだという事ではなくて、そういう地域づくりをしているということが大切だと思っています。自分はこれからもせめてラジオ体操だけは進めていきたいと思っています。地域の人たちが声をかけ合って、健康づくりのため少しでも役立てることを考えて取り組むということが大事だと思います。

木村委員長：予算よりもラジオ体操、さらには大人が参加するようになっている例もあるので、そういうことをこれから工夫してやっていくことが大切だということですね。積極的な考えだと思います。他にいかがでしょうか。

大橋副委員長：私はユネスコの活動に関わっているのですが、札幌ユネスコの方が、情操教育プログラムの「おしゃべランド」のことを、すばらしい取組みだと述べられていました。小学校中学校で１回はあのような体験をできる機会が続いているのは素晴らしいと思いますし、今後もこのような機会が充実していけばと思います。学校の反応などもわかればお聞かせいただければと思うのですが。

西山社会教育主事：「おしゃべランド」の学校の反応は、おおむね非常に良いです。「あらしのよるに」、「おおきなかぶ」、「おならうた」という３つの絵本を取り上げていますが、「おしゃべランド」が終わったあとが、１年生の国語の教科書に「おおきなかぶ」が載っていて、ちょうど授業で取り上げる時期だそうです。「おしゃべランド」で先に読み聞かせを体感した子どもたちが、授業にすんなり入ってくれるので、子どもたちへの情操教育という面と、学校の先生方にとっても、読み聞かせ方の参考になっているとのこ

とです。また、石狩ユネスコ協会の「くるりんぱ」についても、「物事の見方を変えてみよう」「相手の立場になってみよう」というコンセプトなのですが、子どもたちの耳には、「くるりんぱ、くるりんぱ」ととても耳に入りやすいようで、平和教育のスタートラインとしても適していると思います。

東次長：「おしゃべランド」については、担当から申し上げたように、プロのナレーターの方が実際に読み聞かせをするので、話し方や間の取り方などが、先生にはとても参考になるということは聞いています。そういった事業に活かせる内容であるということと、それからユネスコの寺子屋運動というものがありまして、早い段階でしっかり子供たちに理解してもらうということが大切だと思います。「Ｔｈｅ　Ｍｕｓｉｃ」については、ジャズを聴いてもらうのですが、中学生が今、ジャズ音楽に親しむ機会というのはなかなか少ないと思います。目の前で生の演奏をするという迫力と、ジャズ音楽というものは特に、演者間のコミュニケーションが大切になるのです。合図をしたり、アドリブで繋げていくということをしますので、コミュニケーションのとり方が目の前で展開されます。子どもたちも、音楽そのものの素晴らしさと音楽、楽器を通じたコミュニケーションが展開されることに感動しているようです。今後ともこの事業については継続していきたいと考えています。

木村委員長：他にいかがですか。それでは、予算的には大変厳しい状況だとは思いますけれども、有効に事業を実施して成果を上げていただきたいと思います。それでは、次の議題に移りたいと思います。昨年の 11 月 20 日に、社会教育委員と共に学ぶワークショップを開催しました。８月の社会教育主事講習の際にも、厚田でパネルディスカッションを開催して、社会教育委員の方にたくさんご参加いただきました。そこでの成果も踏まえて取り組んだことですが、これを振り返って、社会教育委員の会議として来年度以降、どのように取り組んでいくかについて、皆さんから色々ご意見をうかがいながら考えていきたいと思います。私の方から、ワークショップの成果と課題についてメモを用意しましたので、それを元にお話をして皆さんから意見をいただきたいと思います。

11 月 20 日に厚田保健センターで 6 時から 8 時半にかけて実施しましたが、このワークショップでどんなことをしたのかについて整理すると、厚田の宝物が何か、参加者は何が大切なものであると考えているのかを知るということです。安部内閣の下では地域創生ということが言われていて、地域づくりがとても大切だとされておりますが、その地域の中で大切なことや、さらに発展させていくべきものが何なのかを、みんなで考えようということでした。一般的には「地域を磨く」という言葉を使うことがあります。そして、厚田区の人と旧石狩地区の人では、厚田の宝物が何か、厚田の大切なものはどのようなものかについて、お互いの考え方に違いはあるのかどうかなどを分かり合うことが大事です。これらを、今後の厚田の地域づくりに活かすことが大切です。

今回は、厚田の参加者は水色の付箋紙、それ以外の方は赤い付箋紙を使って、厚田に

ついて大切だと思うことを書いてもらいました。特に、物や事ではなく、それを大切にしたい、活かしたいと考えている人の活動を重視しました。付箋紙に書かれたものをグルーピングした結果、自然・風景が２グループ、生活・市民活動が１グループ、産業・資源グループが１グループ、教育文化グループが２グループの計６グループになりました。グループごとにグループワークを行い、その結果を発表していただきました。

今回配布された報告書は、丁寧にテープ起こしをしていただいて大変良くまとまっていますが、私なりにワークショップの内容を短くまとめてみました。参加者は、旧石狩地区からの参加を含む 46 人、うち社会教育委員は９名でした。事務局や厚田支所にもご協力いただき、平日夜の事業としては多くの参加を得られたと思います。多くの社会教育委員が参加し、厚田区への地域の人々の思いや学びのエネルギーに直接触れることができました。話し合いの成果としては、まとめを読んでいただくと分かると思いますが、１つに、厚田の市民活動が広く横につながっていて、お互いに支えあって取り組まれているということです。２つ目に、産業の資源としては海の幸、山の幸の両方があり、素材はありますが、まだその活用や発信が必ずしも充分ではありません。３つ目に、厚田は自然の宝庫で、色々な自然の体験ができる場所があり、それを活かすことが課題になっています。例えば、夕陽や満月の頃に水面に道ができるということも、本当は宿泊施設があれば楽しめると思われますが、残念ながら宿泊施設はあまり整備されていない、というようなことも含めて課題になっています。４つ目に、地域に誇れる歴史と文化があり、それを子供たちに伝える活動が大切にされています。歴史と文化があり、しっかりと子供たちにも伝えていかなくてはならないということを、地域の人たちが十分に理解しています。５つ目に、これら４つのことを、繋げたり組み合わせたりしながら活動することが大切になってくると思います。６つ目に、これらの課題についての今までの取組みを更に発展させる地域の拠点として、道の駅の役割が期待されています。以上がワークショップの中で話し合われたことだと思います。

今回、社会教育委員をはじめ旧石狩市の市民にとってはとても大事な発見がありました。しかし、当日、厚田の何人かの方から厳しい指摘も含めたご意見をいただきました。厚田では、今回のワークショップのようなことは、これまでもう何回もやっていて、問題は、どうすればもう一歩その先に踏み出すことができるかであると言われました。確かにそのとおりだと思いますが、今回のワークショップに参加された厚田区の方にとっては、ここから一歩踏み出して、旧石狩市の市民と厚田区の市民とが、厚田区の発展のために具体的にどのような協働が可能なのかということに迫る学びが必要とされていることが明らかになったのだろうと思います。結構難しい課題ですが、これについては、来年度以降、さらにもう一歩踏み込んでいくことが必要ではないかと私は思っております。

来年度の具体的な取り組みについては、来年度の第１回目の社会教育委員の会議で話し合いたいと思っていますが、現時点で私なりに考えました。ひとつは、今年は厚田でやりましたので、来年は同じような取組みを浜益でやりたいと考えています。もう一つ

は、来年は浜益に行くとすると、その次は、旧石狩の公民館やコミュニティセンターなどの適切な場所で、旧石狩の市民にもたくさん集まっていただき、厚田や浜益の社会教育の課題は何か、そして厚田浜益の発展が大事であるとすると、そこに石狩市民全体としてどう関わることができるか、ということを一緒に話し合う場があると良いと考えております。ワークショップやパネルディスカッション、または、全国的に地域づくりで成果をあげているような方に講演していただき、その後に皆で話し合うなど、やり方は色々あると思いますが、そのためには、どのような取り組みをするのか検討する上で、厚田、浜益それぞれの地域のリーダーに、社会教育委員で手分けをしてヒアリングをしてはどうかと考えています。そして、正式に申し入れがあった訳ではありませんが、北海道教育大学では、来年度の社会教育主事講習の現地実習を石狩市で開催したいと考えているようです。平成 27 年度は石狩市内では宿泊しませんでしたが、教育大にはテントや寝袋も揃っているので、学校や公民館での宿泊も含めて考えてみたらどうだろうかという意見も、北海道教育大学の先生からあがっています。もちろん、石狩市で引き受けていただいた場合を前提にしていますが、防災教育などのプログラムを一緒に組むなど、色々なアイデアも含めて話し合おうとしているところです。例えば、８月の社会教育主事講習の現地実習は浜益で実施して、社会教育委員の取り組みも兼ねて、浜益の課題を一緒に考えるという方法もあります。今回厚田で開催したワークショップを浜益で実施して、10 月に厚田浜益で２年間続けたワークショップのまとめとして、シンポジウムやパネルディスカッション、講演会などを実施することも考えられるかもしれません。今のところまだ私一人の勝手なイメージですが、これまでの取り組みを振り返りながら私が考えていることを皆さんにお伝えした上で、次回につながっていくようなご意見を皆様からいただければと思います。

高橋委員：一昨年、浜益で社会教育委員と学ぶ市民講座を開催して、ハママシケ陣屋跡を見たり、地域おこし協力隊の話を聞きましたので、次年度は浜益ではなくても良いのではないかと思います。

木村委員長：浜益までわざわざ行かなくても良いのではということですね。

高橋委員：そうです。

石井委員：でも、その土地のことは、実際にそこに行かないとわからないという気もします。

木村委員長：平成 25 年度に厚田で講座を実施して、平成 26 年度に浜益で講座を実施したのです。そして、今年度は厚田でワークショップを実施しました。私たちとしては、厚田も浜益も大切に考えていきたいので、次年度は、最初の講座で勉強したことを踏ま

え、最初よりは浜益のことを少し知っていますから、それをもとに浜益の地域のことを一歩進んで考えたいと思っています。

高橋委員：宿泊場所で、番屋の宿という選択肢はないのでしょうか。

西山社会教育主事：番屋の宿は現在営業しておりません。

東次長：人数は限られますが、番屋の湯のほうは宿泊できます。

木村委員長：むしろ厚田浜益の方で泊まるほうが逆に難しいかもしれません。必ずしも厚田や浜益でなくても、本町でもいいかもしれません。宿泊を伴うのであれば、石狩に泊まることが良いのではないかと思います。

東次長：民宿などであれば浜益にも何軒かあります。

木村委員長：問題は、30 人ぐらいの規模で一度に泊まれる場所があるかということです。受講生に 30 人に教員が６～７人ですから、合計 40 人近く泊まることになります。

山田委員：浜益に泊まろうと思えばいくらでもあると思います。民宿も旅館もあります。極端に言うと、旧浜益中学校などは使えないのでしょうか。

東次長：旧浜益中は使えないと思います。

山田委員：先日、厚田区地域協議会の佐藤会長とお話しをしました。厚田は確かに大人が子どものためにも頑張っているのですが、問題の原点は人口減少であり、これを何とか止めたいのだというのです。私は北広島や恵庭市、千歳市などでも勤務しておりましたが、私が現職の時、北広島市と石狩市は人口が同じぐらいでした。今は完全に石狩市が下回っています。特に恵庭市の人口は７万以上になり、石狩市は６万人を切ってしまいました。佐藤会長は、厚田の地域づくりをやっているけれど、行きつくところは人口減少を止めたいのだと言っていました。だからやはり人口が少なくなると、学校がなくなってしまいます。厚田区では、小学校３校、中学校２校を小中一貫校１校にするかどうかという話があるのです。なかなか難しい問題ですが、旧石狩市の人口も減っているのですよ。

木村委員長：ベッドタウンではありますが、石狩市はＪＲもありませんので、交通アクセスの問題がありますね。
山田委員：私が言いたいのは、社会教育委員として考える際に、やはりまちづくりをど

うするかということを、人口減少も含めた中で何とかしていかなければ、このままだと人口は減っていきます。厚田もこれだけ頑張っているのに人口が減っているのですから。

木村委員長：もちろん、まちづくり全体のことを考えなくてはいけません。恵庭市は子育て環境が充実していることを、市民が知っているということもあると思います。ただ、施策全体で見ると石狩もとても頑張っている部分があります。もちろん、社会教育だけで何とかするわけにはいきません。ただ、札幌の人口も、むしろ都心の方に集中しているわけで、南区などは人口が減っており、逆にほとんど都市部に縮小していくとすると、恵庭市や北広島市も都市部に縮小することになります。石狩市はどちらかと言うと、恵庭市や北広島市に比べて漁業や農業の第一次産業がプラスになっていることと、団地の高齢化などと色々重なっておりますが、産業をどうするのかという要素を考えると、積極的な見通しが一方で存在しているのですね。そういうことも含めて総合的に考えていく必要があると思います。

大橋副委員長：新聞に出ておりましたが、浜益区の地域おこし協力隊が中心となって、浜益中学校の中学生に「中学生が考えるこれからの浜益」という題でワークショップ的な取り組みを行ったようです。以前にも浜益区で市民講座を開きましたが、この取り組みは地域おこし協力隊が中心になり、中学校を巻き込んで実施されたので、私たちが浜益区でのワークショップをどのようにするか、また浜益の課題にはどのようなものがあるかを考える上でも、事業の経緯を知っておくことが必要だと感じておりました。

木村委員長：今回のワークショップもそうですが、こちら側から勝手にやっているという感じになっていないだろうかと気にしています。むしろ、厚田の人たちが本当にやりたいことを、厚田の人たちに実践していただく、という形でできたかどうかを考えると、少し不十分な気がしています。そういった反省も踏まえて、浜益の人たちは今どのようなことをやりたいのか、むしろ浜益の人たちの意見をもっと積極的に取り入れる形で企画をしてはどうかと考えています。厚田での取り組みも、佐藤会長や地域おこし協力隊とヒアリングをしたうえで企画してはいるのですが、私たちが勝手にやったという感じがまだまだ払拭できないところがあります。それが、グループワークなどは今までやっているという声になったのだと思います。少なくとも私たちにはとっては、色々な新しい発見があり、厚田のことをあらためて見直すことに繋がりましたが、厚田の人たちにとっては、自分たちでいつもやっているようなことに、引っ張り出されたという印象があったかもしれません。しかし、もしそうであれば、厚田の人たちも、石狩市民全体に自分たちの取り組みを伝える取り組みをさらにしていただければ、ありがたいと思います。

相馬委員：今の浜益フォーラムには、私も参加しました。今まで何回かワークショップに参加したことがあるのですが、中学校の生徒は全員参加していました。その他に地元の各種団体の役員、地域協議会、トータルで 50 人から 60 人参加していたと思います。話し合いの中では、どういうことが必要で、このようなことをやって欲しい、ということを、子どもたちが真剣に考えていて、なるほどと思いました。ワークショップという方法の進め方にはまだ慣れていなかったのですが、最高の話し合いができたと思います。これからも、浜益区の色々なことを考える機会として続けられるといいなと思いました。色々な話が出たのですが、特に子どもたちのことを考えると、中学校３年までは浜益区に学校がありますが、高校、大学とその先進学するには、旧石狩や札幌に出てこなければならないのです。そう考えると、一度出ていくにせよ、また浜益に帰ってきてもらう必要があります。現代の、子供たちにとっての浜益区をどうするべきなのかを考える必要がありますが、今回の話し合いの中では、これらの課題を考える上でのヒントがたくさんありました。出来る、出来ないではなくて、自分たちがどうすべきか、しっかりと考える必要があります。今回は農業漁業をされている方や団体の方などたくさんの方が参加しており、色々と話を聞きましたが、すごい活動をしているなとつくづく感心しました。やはりこういう機会を作って情報提供していくことが大切です。浜益区をどうしていくかということを話し合い、意見を合わせて、行政も地域ももっと勉強して、この浜益という地域を作っていかなければならない。この間の厚田のワークショップでも、あれだけの人数が集まりましたが、やはりこれからも、こういう機会が必要だと思います。

木村委員長：今せっかく二人の委員から指摘していただきましたので、この事業の報告書のようなものがあるかどうか、事務局の方で探していただけますでしょうか。

西山社会教育主事：浜益フォーラムの報告書ですね。

東次長：10 日に開催されたばかりですので、おそらくこれから作成されるかと思いますので、確認させていただきます。

相馬委員：山岳会の先輩とかに来てもらって色々と話を聞いたのですが、例えば浜益の黄金山は１年間で２千人以上が登山しています。ということは、それだけの人が浜益に入っているということです。そして札幌から来る人が多いということです。

石井委員：初心者向けで経験を積むのに良いということですね。

相馬委員：名山のひとつに指定されていますし、他に旧白鳥番屋などもありますので、観光客に来てもらう材料のひとつになると思います。特に今、荘内藩陣屋研究会という

ものができて活動しています。実際に浜益には、道外から結構人が来ているのです。その人たちから、荘内藩陣屋跡はどこかと聞かれた時に、地元の人でもなかなかわからないのです。そこで、陣屋研究会では案内板を作っています。こういう活動を積み重ねて、浜益区の良さを道内道外へと発信する。それが浜益区に来てもらう方法の一つだと思います。

石井委員：登山の初心者は黄金山に登ってから、大きな山へ登る方が多いと聞きました。

相馬委員：先日、札幌の地下歩行空間で、厚田、浜益の展示がありました。そこで、はまます資料館に置いてある、大きな漁場の模型を展示したのですが、地下歩行空間は人が多くて驚きました。かなりの人が足を止めて見ていってくれていました。もっと情報を伝えていって、浜益区を知ってもらえたらと思っています。黄金山と資料館、荘内藩陣屋などを組み合わせてＰＲすることで、厚田、浜益に足を運んでもらうことに繋がればと思います。

木村委員長：そういうことは私も初めて知りました。ビジターセンター的な位置づけの場所を用意するという方法もあると思います。そういうことも含めて、新しい浜益を石狩の方たちに発見してもらうような学びの場を作っていきたいと思います。報告書の中で、付箋で書かれた主な意見については、若干説明をつけた方がいいという考えがありまして、例えば、旧厚田スキー場やおひょうの木、魚つきの森プロジェクトなどが付箋に書かれましたが、これらをただ載せるのではなくて、魚つきの森プロジェクトとはどのようなことなのか、簡単な説明などを加えると、市民の皆さんに読んでいただけるようになるのではと思いますので、後で検討させていただければと思います。時間かかるので、私もお手伝いしようと思いますが。

西山社会教育主事：注釈をつけるということでしょうか。

木村委員長：全てに加える必要があるかどうかわかりませんが、少なくとも石狩の人たちがこの報告書を読んで、なるほどと思っていただけるような編集を若干加えてはどうでしょうということです。せっかく丁寧にまとめていただき、すごくいい報告書になっていますので、場合によってはワークショップの写真を減らして、付箋の説明を増やすなどできれば良いと思います。

東次長：主旨そのものが厚田の宝という形ですので、宝というものを一枚別の資料にするというのも一つの方法だと思います。急いで作りなおすということではなく、方法についてはご相談させていただきたいと思います。

高橋委員：おひょうの木というのは、ほとんど知られていません。道新主催の事業で厚田公園に行ったときに、とても大きな木で、王様の冠のような葉っぱの不思議な木がありました。雨の中、一緒にいた人が調べたところ、おひょうの木であるとのことでした。その木が今もまだあるのかを確認したいという気持ちがあります。写真は撮っていませんが、厚田のキャンプ場でした。道路ふちなので車で行けば見つかりますが、曲がりくねった道路にありました。あれは珍しいと思います。

木村委員長：多分、私も木の名前自体は聞いたことがありますが、見たことはありません。アイヌの人たちは、この木を活用していたのではないでしょうか。

高橋委員：私もそのような名前の木があることを知りませんでした。葉の１枚１枚が王様の冠のようになっていて、ギザギザになって上のほうに丸がついているような、不思議な葉でした。社会教育と産業、町おこしを一緒に進めていって、石狩、厚田、浜益まで何泊かの観光ルートを作って、企業が乗ってくれるといいですね。

木村委員長：まずは泊まるところですね。

高橋委員：泊まる場所は、茨戸のシャトレーゼはどうでしょうか、でも石狩市内ではありませんね。

木村委員長：社会教育主事講習の懇親会をシャトレーゼで開きましたが、あそこは札幌市になりますね。

高橋委員：石狩市だけではなく、札幌市も巻き込んでしまうのもあるのではないでしょうか。

木村委員長：そういう動きは、「鮭の道」や「ニシン物語」のような企画をするなど、色々な方法が考えられると思います。

高橋委員：アイデアは色々出てきますが、具体的に実現するのは難しいですね。

木村委員長：いしかり市民カレッジでバーチャルツアーのような講座を開催するという方法はできませんでしょうか。

高橋委員：講座は、日帰りで短い時間しかできないと思います。

石井委員：石狩をめぐる講座を実施していただくのはいかがでしょう。

高橋委員：そのような講座は、市民カレッジでは以前に何回も実施しています。

木村委員長：まずバーチャルでやるのはどうでしょう。１日目は厚田のニシンの話をして、２日目は浜益のことを取り上げる。その講座を出発点にして、ツアーを企画しては。

高橋委員：現地に足を運ばないと、講座だけでは難しいですね。色々な方法が考えられると思いますが、産業に結びつける方法がすぐには思いつきません。

木村委員長：我々が何かアイデアを出すということよりも、地元で頑張っている人たちが元気になることをしたほうがいいですね。地元で、一生懸命農業や漁業に付加価値を加えたり、滞在型観光を考えたり、そのように頑張っている人たちが、他の人の力を貸りるともっとよくなるということに気づけるような、そんな学びの場を作ることが大切なのだと思います。

山田委員：最近感じるのは、社会教育委員の使命は何かと聞かれたら、地域社会の課題、問題を解決するための手段を考えることですよね。

木村委員長：学習を通じてということですよね。

山田委員：浜益でのワークショップをどう取り組むかは、新しい年度で決めればいいことですが、厚田区・浜益区を発展させるために石狩市民に何ができるか、というテーマでパネルディスカッションを行うことと、厚田区・浜益区のリーダーに社会教育委員がヒアリングを行うことは、必要かなと思います。市長もおっしゃっていましたが、厚田区の人々が非常に頑張っているということが伝わってくるそうです。実際に、厚田区の人々の結びつきはとても強くなっていると感じますが、旧石狩市もそうなることが望ましいと思います。そのためには、社会教育委員は色々な形で学習を続け、地域の人たちの様々な意見を聞かなければならないと感じています。それを行政に反映させるのが、社会教育委員なのだろうと、この数年間で感じました。

相馬委員：地域協議会は、合併市町村でなければ存在しませんので、厚田と浜益には地域協議会が置かれています。設置期間は 10 年でしたが、また５年延びました。地域協議会を構成している、厚田区、浜益区の色々な団体の人々の交流というのが、元々強かったのだと思います。厚田区地域協議会の佐藤会長の話を聞いていて、なるほどと思ったことがあります。地域協議会の集まりと、一般の各種団体の代表者の集まり、どちらも

厚田区と浜益区を良くするために動いています。しかし、地域協議会というのは、合併したことにより、市町村議員がいなくなったときのために国の制度として作ったとのことですから、だとすると、地域協議会の役割というのは、地域の色々な課題など突き詰めて、地域全体で共有する必要があると思います。一般の団体の集まりと区別しなければならないと思います。なお、浜益にも民宿はあります。札幌市内のホテルのような施設ではありませんが、一般的な宿泊できる施設は５箇所ぐらいあると思います。

木村委員長：どうもありがとうございます。合併から 10 年が過ぎて、今までは、厚田区、浜益区それぞれの地域協議会が地域をまとめてきたのですが、おそらく今度は、小中学校の統廃合が始まるのと、旧石狩に近い人たちがそちらに行くようなことになると、地域協議会が今までと同様に地域のまとめ役を続けられるかという問題も起こってきます。厚田の中の望来や聚富のコミュニティをどのように継続して保つか、そのために社会教育にどのような役割があるか、などということもすぐに課題として出てくるわけですが、統廃合については話し合いが進められている最中なので、色々な具体的提案が出てきたところで、もう一度、社会教育の課題をどのように考えるか、ということになると思いますが、まずは厚田や浜益の魅力を、地域の人や子どもたちがしっかり理解して、石狩の市民達と共有しながら、石狩全体として発展できるように、そのために社会教育が大事な役割を果たしていくということが大切なのだと思います。この件については、今日の意見も踏まえながら新年度に引き継いでいただいて、話し合いを続けていきたいと思います。ありがとうございました。それでは次第の最後、その他について事務局からお願いいたします。

斉藤主査：私の方から、講演会と研修会のお知らせをさせていただきます。一つ目は、北海道の生涯学習をリードされてきた、木村純先生退職記念講演会・祝賀会のお知らせです。是非ご参加いただきたいと思います。二つ目は、2015 年度北海道大学公開講座・生涯学習計画セミナーです。ご参加をご希望の方は、お申し込みください。

木村委員長：生涯学習計画セミナーは、石狩市の社会教育委員の方はご招待させていただきますので、ご検討ください。講師の出口さんは、今、北海道大学で学務長をされていますが、文部科学省でずっとコミュニティスクールの担当官をしていた方です。厚田の地域協議会でも、厚田の小中学校を中心にコミュニティスクールを検討されていることもあって、コミュニティスクールのことを社会教育としても勉強する機会を作りたいと思いました。出口さんは文科省の前は、和歌山大学で私と同じような研究をされていて、その時から一緒に仕事をしていたので、北大にいらっしゃる間に一度、一緒に何かをする機会を作ろうということで、３月 26 日ですが企画しました。それと、石狩市民図書館からも、あい風図書館について報告してもらうことになっておりますので、社会教育委員の皆さんも、時間があれば参加していただきたいと思います。退職記念講演会

は、私はずっと市民と関わる仕事をしていたので、大学の先生や学生だけではなく、市民の方に来ていただくことを考えて、少し広めの会場と、懇親会を開催します。私が大学生協の理事長をしているので、千数百席ある北大で一番大きな食堂を仕切って、学生がもしかしたらまだご飯を食べているかもしれませんが、できるだけ皆さんに参加してもらえればと思います。市民の方もたくさん参加しますので、そんなに堅苦しい場所ではないと思います。国立教育政策研究所の笹井生涯学習政策研究所長や、道外大学から担当者が何人か来ますが、皆さんにも交流していただければと思います。

東次長：一点お知らせします。新年度の市教委の取組みについてお話させていただきたいと思います。俳句のまち～いしかり～として、古い歴史を持った石狩を、さらにもう一度広めたいとの主旨で取組みを続けておりまして、現在、吟行マップを作っています。俳句を詠むのに適した場所としてどこがいいのかということを、俳句のまちいしかり実行委員会という組織が中心となってピックアップをし、３月中に作成する方向で最終調整をしています。本町地区、花川、厚田、浜益地区など、地区ごとにそれぞれ写真を入れながら、わかりやすく作り上げています。あわせて石狩の俳句の年表を作っており、安政年間から始まった俳句の歴史をあらためて整理しました。完成しましたら、皆様にお伝えしたいと思います。それと、新年度は市制 20 周年であり、色々な事業がこれから具体化していきます。その中で、ＮＨＫのＥテレで「俳句王国がゆく」という番組が月１回、毎月第３日曜日に放映されておりますが、この度、石狩で収録することになりました。６月 25 日の土曜日に、花川北コミュニティセンターで収録を行う予定で、具体的に詰めているところです。全国ネットということもあり、これを機に石狩が俳句のまちであることを広く知らしめたいと考えており、加えて子どもから大人までを含め、さらに俳句を市内外に知らしめる機会にしたいと思っております。また個別にお願いをさせていただくことがあるかもしれませんが、その時はよろしくお願いいたします。

木村委員長：よろしくお願いします。それでは会議を終わります。どうもありがとうございました。

議事録は上記のとおりであることを認めます。

平成２８年　３月２２日

石狩市社会教育委員の会議　委員長　木 村　純